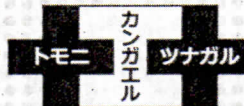


shimin-hatsu@tokyo-np.co.jp



「わくわく」広げたい

病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア 理事長 坂上和子さん (61)

a.so.vo@y3.dion.ne.jp



さかうえ かずこ 1957年、遊びのボランティア12年、同様のボランティアを4年、大分県出身、武蔵野大を立ち上げ、2006年、Nつなぐ全国小児病棟遊びのホ
大学院修了、新宿区の保育園、PO法人病気の子ども支援ネ
ット遊びのボランティアに、組織、共同代表を務める。

長 い入院を余儀なくされている子どもがいます。治療と検査の繰り返しで、子どもらしく「わくわく」するような時間がありません。

付き添いの母さんは、子どもが寝るまで病院を離れられず、食事入浴もままなりません。疲弊しています。こうしたお子さんに寄り添い、歌を歌ったり、絵本を読んだり、子どもの要求に応える一方で、お母さんをわずかな時間ですが解放してあげる。そんな活動を始めたのが二十七年も前のことになりました。

最初は、新宿区の訪問福祉士として病院を回っていたんです。ただ、新宿区の職員なので区民のお子さんがみてもあげられなかった。活動を知った保護者から要望が寄せら

びが必要なんです。そういう思いで

れ、病院側とも話し合い一九九一年に、保育士ら六人で現在の国立国際医療研究センターの小児病棟に遊びのボランティアを立ち上げました。

大人にとって病院は病気を治療する場所しかありません。けれども子どもにとっては、長い入院になればなるほど、治療を行うとともに、成長していかなければならない場所でもあるんです。

子どもが健全な心で成長していくためには、年齢に応じた遊びを通じて、わくわく感、喜びなどのプラスの感情を経験することが必要です。病院という閉鎖的で刺激の少ない環境に長い間置かれ、「我慢しようね」と言われ続けられている子どもたちこそ、より遊びが必要なんです。そういう思いで

始めた活動も最初は手探りで、他の病院に活動を広げようとしても、「病棟に遊べる子どもはいません」と言われることも多かった。

ようやく最近になって、病院側の理解も進んできました。高度医療を施す小児医療施設でボランティアが入っている割合は、六割との報告があります。

ボランティアが病院に入るには、感染や事故などの責任問題、プライバシーの問題など高いハードルもあります。また、どの子どもにもどんなボランティアが必要なのか、見極めることも大切です。このため病院とボランティアの間をつなぐコーディネーターが必要となってきます。この点、米国やカナダなどでは九割以上の病院で、専従職員がこのコーディネーターを担当しているんです。しかし日本では専任が二、三割程度といわれ、大変遅れているのです。

らに、ボランティアの活動形態もさまざまです。個人で悩みながら奮闘している方も少なくありません。私たちのNPOに助成していただいていた市民社会創造ファンドさんから、こうしたボランティアをつなぐネットワーク作りを、と勧められ二〇一二年から着手しました。ボランティア相互の情報交換、理解を得るための継続的な啓発などを行い、ボランティア活動の質の向上を目指しています。十二日には第四回の交流会を東京・小石川のイーザイ株式会社ホールで行います。ご関心のある方はのぞいてみてください。



病室で絵本の読み聞かせを行うボランティア＝坂上和子さん提供

小 児がんなどで長い入院が必要なお子どもたちがある。「こうした子どもたちにこそ成長のための遊びが必要だ」としてNPO法人「病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」が活動を始めて二十五年。社会の理解も進んで来たがそれでも欧米などに比べて遅れている部分も多い。理事長の坂上和子さんは、「より質の高いボランティア活動の普及を」と全国のネットワーク作りを進めている。(仁賀奈雅行)

さ 形態もさまざまです。個人で悩みながら奮闘している方も少なくありません。私たちのNPOに助成していただいていた市民社会創造ファンドさんから、こうしたボランティアをつなぐネットワーク作りを、と勧められ二〇一二年から着手しました。ボランティア相互の情報交換、理解を得るための継続的な啓発などを行い、ボランティア活動の質の向上を目指しています。十二日には第四回の交流会を東京・小石川のイーザイ株式会社ホールで行います。ご関心のある方はのぞいてみてください。